

感動新聞 平成29年9月号 発行者 細川栄一
ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。
喜んで頂ければ幸いです。

最後の瞬間

「ありがとう」（地球村出版）、この本の中に、1985年に524名を乗せた日航機が御巣鷹山に墜落した話を書いてありました。

悲惨な墜落現場から、飛行機が操縦不能になって墜落するまでの激しい揺れの中で乗客が自分の死を覚悟して、家族や友人に書き残した多くのメッセージが見つかりました。

「無念だ」

「どうしてこんな事故に遭うんだ」

という言葉彙よりも不思議なほどに……

「幸せだった、感謝している」

「ありがとう」

「みんな仲良く」

などの感謝のメッセージが多く書き残されていました。

亡くなられた方のご遺体も次々と発見されていきましたが、その中に黒焦げになった中年の男性の胸元に、小さな子供が抱きしめられて死んでいるのが見つかりました。

自分が黒焦げになっても、とっさに「我が子の命だけでも」と抱きしめて、熱く苦しんでも、その手を緩めずにいた「死覚悟、一瞬の親心」という新聞の見出しで報道されて多くの人の涙を誘いました。

ところが、3日後に実は抱き合っていた二人が親子ではないことがわかりました。
小さい子供の本当の親は、別の場所から発見されました。

子供を抱きしめた男性は自分の死を覚悟した瞬間でも、飛んできた見ず知らずの子供を必死で抱き寄せて、自分の懐の中で深く守ろうとしたのです。

この子供は残念ながら亡くなってしまいました。男性に抱きしめられた時、事故の恐怖の中でも一瞬、心が救われたはずだ。

この男性のように人生の最後の瞬間まで、誰かの役に立てる生き方をしたいと思います。

この事故では多くの方がお亡くなりになりました。

残された遺族の悲しみも大きかったと思います。

「幸せだった、感謝している」

というたくさんの方のメッセージがせめてもの救いだったかもしれません。

大切な人との別れはどんな形でやってくるかは、誰にも分かりません。
この事故のように突然の場合もあります。

だから、一緒にいられる時間を大切にしたいですね。